

式 辞

本日、卒業式を迎えられた 191 名の皆さん、まことにおめでとうございます。在籍されていた大部分の期間コロナ禍で様々な不自由を強いられ、多大なストレスをくぐり抜けられてこの度の卒業にたどり着かれたことに、心から敬意を表します。

とくにこの最後の 1 年は、コロナ禍に加えて、核戦争や第三次世界大戦にも発展しかねない危険性を孕んだウクライナ戦争の勃発という事態が加わりました。皆さん方のような若い世代を含め、多くの人命が失われ、傷つくという悲惨な事態が連日報道されています。

こうした事態は、物価の上昇から観光のあり方に至るまで、多方面にわたって市民生活に深刻な影響を及ぼしています。芸術分野を一例に取りましょう。この間、ウクライナ国立バレエ（キエフ・バレエ）の来日公演が行われています。ところが、ウクライナ文化省からの要請により、ロシア人作曲家の楽曲の演奏及び使用を控える事になりました。バレエと言えはすぐに思い浮かぶのはチャイコフスキーですが、日本公演では、急遽別な演目に差し替えられました。ロシア軍の攻撃の中で身近な人々を失い、ふるさとが破壊されている状況を考えて、この決定は心情的には理解できます。皆さんならこの問題をどう考えるでしょうか？

私の身近なところでも、この問題と直面する機会がありました。ウクライナと関わりの深いある日本人の指揮者が、日本国内での演奏活動においてロシア民謡を取り上げるかどうかという問題に直面したのです。悩んだあげく、彼はロシア民謡を演奏する決断をしました。ウクライナ人の友人たちを思い浮かべる中での、苦渋の決断です。

オリンピックやサッカーのワールドカップでも、政治とスポーツとの関係をめぐって物議をかもしたことは記憶に新しいところです。クラウゼヴィッツは有名な著書『戦争論』の中で、「戦争は政治の継続である」と書いています。戦争と政治は武力の関わり方の面で形は違っていますが、クラウゼヴィッツの議論は、これらが同根・同質の問題であることを示しています。

この問題への対応の仕方には、二つの観点を考慮する必要があると思います。一つは、時間軸です。例えばウクライナの問題は、現在進行形、リアルタイムの問題です。現にロシアから戦争を仕掛けられている残酷な現実が感情的な拒否反応を引き起こすことは自然なことです。一方で、かつてナチスドイツが行った残虐行為があるからと言って、その被害者であった国々の人々が、今日バツハやベートーベンを拒否することはありません。それどころか、有名な「喜びの歌」は、いまでは EU 全体の国家のような扱いになっています。その意味では、やがてはチャイコフスキーも再びウクライナの皆さんに受け入れられていくことになるでしょう。

そこで残るのは、ウクライナ戦争のようなリアルタイムの世界で、こうした問題にどう対処するかです。結論的に言えば、一番重要なことは、統治機構としての国家と、その国で暮らす国民とを区別して考えることができるかどうかだと思います。ウクライナの問題で言

えば、ウクライナの人たちが、プーチン政権とロシア国民をどれだけ区別できるかです。言い換えれば、これまでウクライナ人とロシア人がどのように交流を積み重ね、そして今このときとこれから、どの程度連帯できるかということです。核兵器ではなく、人々の交流の発展こそが、根底において戦争の大きな抑止力をなすものと言えます。

本学は、観光の実体を「鑑賞・創造・交流」と捉え、「観光は平和へのパスポート」という国連の決議に添って、何よりも「交流」の発展による「世界市民」の形成・発展を目指しています。多様な国籍の人々で構成されるキャンパスライフを過ごしてきた皆さんが、卒業後に様々な分野で人類の発展と世界平和の実現に貢献されることを、こころより願っています。卒業でいったんキャンパスから離れ様々な歩みを進めて行かれるわけですが、Tourism for Peaceの実現に向けて、これからも共に頑張りましょう。